



庄田 亜紀 (しょうだ あき) 第五小 6年生

作品名：助かった命と助からなかった命

図 書：助かった命と助からなかった命

私は「助かった命と助からなかった命・動物の保護施設ハッピーハウス物語」という本を読みました。読もうと思ったきっかけは、「助かった命と助からなかった命」とはどういう事を意味しているのか気になり、知りたくなったからです。この本は、大阪の山の中にある、生まれただけの赤ちゃんネコから寝たきりになった老犬までを預かる保護施設の動物たちの実話です。

読んでいて思った事は二つあります。

一つ目は、ペットも人間も同じ生き物なのだという事です。動物の保護施設「ハッピーハウス」には、約六百頭の犬やネコ・にわとり・うさぎ・たぬきがあります。そしてそのほとんどが迷子や人間に捨てられたり、ぎゃくたいを受けたり、たくさん飼いすぎて手に負えなくなったり、飼い主が年をとったり、ひとり暮らしの飼い主が亡くなってしまったりと、様々な理由で保護されたペットたちなのです。中には、捨てられたあと逃げる途中で車にひかれたり、トンビやカラスに頭をつつかれてしまい、ケガをした動物もいます。さらに、全国で年間約六万頭もの犬やネコが殺処分されているという悲しい事実を知りました。私はお母さんが動物アレルギーのため、カブトムシを飼っています。たまにえさをあげることを忘れてしまい、おこられる事もあり飼いたくなくなる時もありました。でも、もし自分が一日食事や水をとらないでいるとしたら、本当に辛いことです。動物は言葉が話せないので、SOS が出せない分、そのまま命を落としてしまうかもしれません。カブトムシたちが夜になって「ガサゴソ。」と元気に動きまわる音におどろく事もありますが、たくましく生きている事を実感でき、嬉しくなります。お世話しているだけでなく、私も元気をもらっています。動物にとっては自然の中で暮らすのが一番だと思うので、飼うとしたら責任を持って最後までお世話しなければいけないな、と思いました。

二つ目は、命に大きい小さいはない、という事です。私は今年の七月、八王子霊園を訪れました。その時に、ペットのお墓というものがあることを知り、とてもおどろきました。同時に、ペットを大切に、共に生きている人もたくさんいるという事がうかがえました。動物でも、体に障害があっても、

年をとっていても、命の重みは同じです。だから、人間が自分の勝手にペットを簡単に捨てたりする事はあってはならないと思いました。

私はこの本を読み終わって、「助かった命と助からなかった命」の生死は、人間によって左右される事も多いと感じました。著者の甲斐直子さんも、こう言っています。

「命は強いけれど、とても弱い。大事にしないとすぐにだめになってしまいます。それは動物も植物もみんな同じです。一生けん命生きて、自分の命も他の命も大切にしてください。」

かわいそうだと思って気まぐれにえさをやると、のら猫がどんどん増え、つかまえられて殺処分されることもあります。だから、大切なのは自分さえよければそれでいいという考えではなく、お互いが安心して幸せに生きていくには何ができるかを考える事だと思いました。お金でペットを飼える時代ですが、だからこそ、自分自身が責任を持ってその命を大切にしていかなければならないと強く思います。私は、一人でも多くの人に命の大切さを知ってもらえるように、この本で学んだことを伝えながら、うちのカブトムシのお世話を一生けん命続けていきたいと思っています。